



新米の試食で担当職員の説明を受ける来客者

今年好天に恵まれ、稲の生育もよく、「やや良」の豊作となった下妻の米。地域ブランド米の確立を目指すJA常総ひかりと下妻市担い手育成総合支援協議会が9月21日・22日の両日、やすらぎの里しもつまを会場に「下妻産新米まつり」を開催しました。

イベントでは、収穫したばかりの下妻産新米で、炊いたご飯に光沢と香りがあり、噛むと甘みが口の中に広がるのが特長の「コシヒカリ」と、モチモチした食感が特長で、冷めてもパサつかず美味しく食べられる「ミルクークイーン」の2品種が試食・即売され、市内外から訪れた家族連れなどで賑わいました。

つくばみらい市から夫婦で訪れた40代の男性は「仕事で弁当を持っていくので、冷めても美味しいと聞いたミルクークイーンをぜひ買ってみたい」と話してくれました。

下妻の美味しい新米を食卓へ

下妻産新米まつり

県民の交通安全意識の機運を高めようと「秋の交通安全キャンペーン」(9月21日～30日)の式典が、茨城県交通対策協議会と下妻市交通安全対策協議会の共催で9月21日、イオンモール下妻で行われました。

約200名の関係者が参加した式典では、下妻二高2年生で生徒会長を務める中山忍さんが「交通ルールを守り、譲り合いの気持ちを大切にします」と交通安全宣言を行い、茨城県警察の荻野徹本部長が「お年寄りの交通事故が夕暮れ時に増えている。反射材を身につけるなど安全対策をお願いしたい」と呼びかけた後、白バイ21台とパトカー8台が会場内をパレードし、パトロールに出発しました。また、会場周辺では県警音楽隊の演奏や下妻ご当地アイドル「しもんChu」のイベント、交通安全教室などを通じて交通事故防止を呼びかけました。

子どもと高齢者の交通事故防止を願って

秋の交通安全キャンペーン



交通安全宣言を行う下妻二高の中山生徒会長

いつまでもお元気で

長寿祝福・敬老福祉大会

9月16日の「敬老の日」にちなみ、稲葉市長は9月17日、今年度100歳以上になる市内の長寿者宅や、施設等を訪ね、長寿を祝福しました。

今年度の該当者は、8月1日現在で20名。市内長塚で104歳の高橋トシさんが市内最高齢となりました。

稲葉市長は長寿者宅などを順次回り、お祝いの言葉とともに記念品の毛布をそれぞれの長寿者に手渡しました。

今でも現役で小友幼稚園の園長を務める福西基さん(下妻乙・陣屋)に、普段の楽しみを尋ねると「毎日、子ども達と遊ぶこと。何でも食べるが、特に甘いものが好き」と笑顔で話し、103歳の年齢を感じさせない元気ぶりを見せてくれました。

また、9月15日には台風18号の影響で天候が荒れ模様でしたが、下妻市民文化会館を会場に「第43回下妻市敬老福祉大会」が開催され、市内の高齢者約400名が参加しました。

会場では、日頃練習してきた歌や踊り、体操などがステージで披露されると、観客席でも一緒に手を動かす方が多く見られ、楽しいひとときを過ごしていました。また、エンディングには特別ゲストで演歌歌手の三城ゆり子さんのステージがあり、軽快なトークと熱唱で会場を沸かせていました。

踊りを披露した60歳代の女性は「毎週1回欠かさず練習している。発表できる場が楽しみ」と話してくれました。



103歳を迎え、ますます元気な福西基さん



元気に踊りを披露する参加者たち



県内の地ビールを楽しむ参加者たち

地ビール工場を有する「ピアスパークしもつま」で9月22日、下妻で初めて地ビール祭が開催され、茨城県内から「しもつまビール」をはじめ、「牛久シャトービール(牛久市)」「やみぞ森林のビール(大子町)」「ネストビール(那珂市)」の計4つのブルワリーによる地ビールが集まり、訪れた地ビールファンや家族連れなど約3,000人を楽しませていました。

この祭りは、市内の若者有志が「地元・下妻に美味しい地ビールがあるのに、もっとアピールできないのか」との熱い思いから、ならば自分たちで県内の地ビール・地酒、美味しいものを集めて地ビール祭を開催しようと実行委員会を立ち上げ、地ビールで地域活性化を図ろうと市商工会青年部と共同主催で開いたものです。

地ビール工場を見学した筑西市の60歳代男性からは「下妻の隣に住んでいながら、こんな素晴らしい地ビール工場があるとは知らなかった。ビール好きなので、また利用したいし、職場の仲間にも伝えたい。イベント会場では県内の地ビールを飲み比べができてとても楽しい」と笑顔で話していました。

地ビールでまちを元気に、下妻で地ビール祭を初開催

茨城Beer11フェスティバルしもつま



熱戦が繰り広げられるメインストレート

普段はクルマの走る楽しさを伝えるべく、取材する側のメディア自らがチームを組み、耐久レースに挑む国内屈指の伝統レース「メディア対抗ロードスター4時間耐久レース」が9月7日、筑波サーキットで23チームの熱戦が行われ、県内外からモーターファン約1,800人が集まりました。

決勝レース前の開会式に出席した稲葉市長は、「普段からの仕事仲間のチームワークを発揮して、クルマで走る楽しさをを見せていただきたい」とドライバーを激励し、下妻市の観光や特産品の梨などのPRも行いました。

筑波サーキット設立当時から数多くの車輛製作等を手掛ける株式会社メッカの中山郁子社長は「最近若者の乗りもの離れが進んでいるが、下妻市内に素晴らしいサーキットがあるのでクルマに親しみ、興味を持って利用してもらいたい」と話していました。

筑波サーキットを地域活性化に活かそう

第24回メディア対抗ロードスター4時間耐久レース



炎が舞い散る伝統の火祭

炎の奇祭「タバカ祭」

たいまつを持った白装束姿の若者が駆け回る炎の奇祭「タバカ祭」が9月12日の夜、大宝八幡宮で行われ、火の粉を浴びると災いを退けるとされ、境内は大勢の参拝客で賑わいました。

この祭りは、約640年前に敷地内で火災があった際、畳と鍋蓋で火を消し止めた故事を再現したものとされ、畳と鍋蓋を石畳に勢いよく叩きつけて消火する様子から出る「バタン、バタン」という音から「タバカ」の名が起ったと伝えられています。

拜殿での厳粛な神事後、白装束姿の7人の若者が畳や鍋蓋を石畳に叩きつけ、たいまつを両手に持って振り回しながら集まった参拝客を追い駆けると、火の粉が舞うたびに境内に歓声が沸き起こっていました。

東部中学校2年の女子生徒は「小さい頃からずっと来ている祭りで、たいまつを持った人に追われるのが楽しみ」と友達との参加を楽しんでいました。

祭りは毎年9月12日と14日の2日間行われ、全国でもここだけの珍しい火祭として、観光客やアマチュアカメラマンなどにも注目されています。



参拝客を追うタバカ祭の炎